

## カタルーニャ夏季大学に参加して

古 石 篤 子

フランス語教師である私は毎年4月に、フランス語を習い始める1年生に、この言語はどんな国で話されているかを尋ねることにしている。もちろんその魂胆は、フランス語を覚えれば、フランスだけではなく、こんなに多くの国の人々とも意思の疎通ができるのですよと、勉学意欲を掻き立てるところにある。この質問に対して新米1年生は、なんとなく恥ずかしそうに「フランス」、「カナダ」、「スイス」、などと答えてくれる。そうしてフランス語をやり始めて何カ月かたったところに、今度は逆に次のような質問を試してみる。「フランスでは何語が話されているのでしょうか。」するとたいてい「ばっかだなあ、フランスはフランス語に決まっているじゃん」とでも言いたそうな眼差しが返ってくる。「日本は日本語」という「単一民族・単一言語国家」を疑わない思考形式の現れである。そこで、フランスでは公用語はフランス語だが、実は8つもの言語が話されているのだと言うと、少し驚いた顔をする。

この夏私は趣味と実益を兼ねて、その8つの言語の中のひとつカタルーニャ語を勉強に出かけた。カタルーニャ語は、現在のフランスのルシヨン地方の他に、スペイン北東部のカタルーニャ地方（ジロナ、バルセロナ、レリダ、タラゴナの4県）、バレンシア県、バレアル諸島、アンドラ、そしてサルディニア島のアルゲロで使われているロマンス語のひとつであり、オック語と密接な関係にある。その全言語人口は約700万人といわれる。7月、9月にはバルセロナ、ジロナ、マヨルカ島などで1カ月の語学講座がいくつかあったが、仕事の都合上8月しか時間がとれなかったのも、いきおい可能性はプラダ

のカタルーニャ夏季大学（UCE = Universitat Catalana d'Estiu：8月16～26日）に絞られた。ところがこれは単なる語学講座ではなく、それどころかカタルーニャ人自身のアイデンティティ確認のための一種のサマーキャンプのようなものであり、おかげで随分貴重な経験をした。以下はその簡単な報告である。

プラダといえば、音楽好きの人なら誰でもすぐP. カザルスを思い浮かべるだろう。プラダは、この偉大なチェリストがフランコ政権との確執から、この政権に反対して移り住んだフランス側ピレネー山麓ルシヨン地方の小さな町である。この町にはP. カザルス記念館があり、サン・ミケル・デ・クーシャ修道院では今も毎夏プラダ音楽祭が開催されている。またこの町には、現代カタルーニャ語の正書法を整えたポンペウ・ファブラも住んでいたことがあり、このようなことが、UCEがこの地で開かれることの機縁となっているらしい。それに、この町からは北カタルーニャのシンボルであるカニゲー山の雄大な姿を望むことができる。

UCEは、1969年に第1回目がプラダで開催されてから毎年夏に行われ、今年で第19回目を迎えた。フランコ生存中はカタルーニャ地方の自治は奪われ、カタルーニャ語の使用も禁止されていたのでフランス側のプラダでのみ開催されていたが、フランコの死（75年）の後、76年、77年の両年にはプラダの他に、スペイン側のビックでも開かれた。しかし汎カタルーニャの気運の高まりの中で、78年からはまたプラダ1カ所に統一されて行われることとなった。参加者は圧倒的にスペイン側が多い（今年は、900人中ルシヨンからの参加者は100人のみ）にも

かわらず UCE がプラダで開かれ続けるのは、上に述べたような文化・政治・歴史的理由の外にスペイン側カタルーニャの町の間に対抗意識があって、例えばバルセロナでの開催はバレンシアの人々には快く受け取られないというようなことにも原因があるといわれる。つまりプラダは中立的で自由の地というわけである。

主催者の話では、UCE はフランコの死後参加者の数が減り、やがて夏休みのお遊びの会のようになってしまった。それを今から3年前の1984年、バルセロナにある汎カタルーニャ的組織であるカタルーニャ研究所 (Institut d'Estudis Catalans) が中心になり、全面的に建て直して今の UCE となったということである。UCE のプログラムの主なものは、プラダの町の外れにあるルヌヴィエ高校を会場として行なわれる。参加者はこの高校の寮で寝食を共にするわけであるが、入寮時に「静かな寮」か「賑やかな寮」かを選ぶことができる。後者を選んではしまうと、カタルーニャ人はなかなかお祭り騒ぎの好きな人々なので、11日間を寝不足で過ごすことになってしまうのである。

プログラムは大きく分けて午前の部、午後の部、夕方の部、夜の部があり、午前の部はセミナーや講演、午後の部はグループ活動、夕方の部は討論会、そして夜の部は芝居やコンサートという風になっていた。内容は例えばセミナー・講演は、カタルーニャ文化入門やカタルーニャ映画論からコンピューター学や宇宙物理学まで、非常にバラエティに富んでおり、総てその道の一流の専門家によって受け持たれていた。ある参加者は、UCE に来る理由のひとつは講師陣の豊富さにあると言っていた。つまり普段たとえ同じ町に住んでいても、なかなか直に会って話を聞いたり議論したりできないような人々と、「同じ釜の飯を食いながら」話ができるのは大きな魅力だというのである。グループ活動には陶器制作、コーラス、グループ心理分析、等々があり、討論会は「欧州議会におけるカタルーニャ」、「南北カタルーニャの協調」等の題に見られるように一般に政治的な

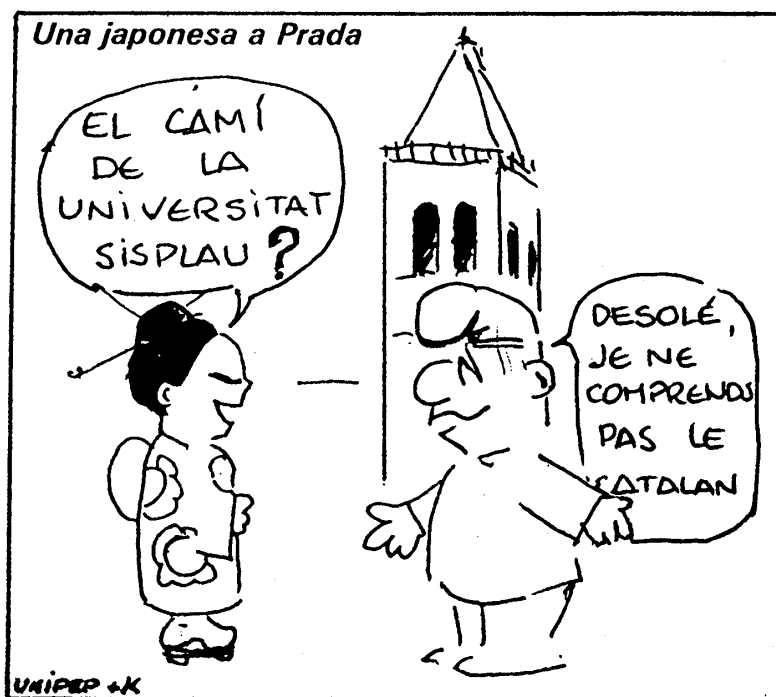
テーマをめぐってのものが多かった。「言語モデルについて」という題の討論会もあったが、ここでは言語の問題ひとつを取ってもそれは政治的色調を帯びざるをえないという歴史的状況がある。夜の部の芝居やコンサートもいずれもレベルの高いもので、例えばジロナの劇団によってカタルーニャ語で演じられたモリエール作「スカパンの悪巧み」は、私がこれまでに観たモリエールの芝居のなかで最も優れていたといえる。私自身は、午前中はカタルーニャ語の授業に出席し、午後はコーラスに参加、そして夜は芝居やコンサートに毎晩出かけた。討論会だけは、まだ言葉が不自由のため退屈だったので、時々様子を見に行くだけにした。このように非常に充実したプログラムであるにもかかわらず参加費は極めて安く、宿泊・食事を含めて1,600フラン (約4万円) である。講師陣が、滞在費をただにしてもらう以外はほとんど各自の持ち出しで来ているということも、このことと関係があるだろう。私は奨学金を申請してあったところ、遠方からの参加という理由で参加費を半額にしてくれた。

さてカタルーニャ語の授業であるが、出席者は全部で3,40人程いたであろうか。そのうち外国人は9人で残りはカタルーニャ人である。カタルーニャ人であっても学齢にあったときに学校でカタルーニャ語を教えていなかったような状況にあった人々は、話せるけれど正書法を知らない。彼らは UCE を利用してそれを学びに来ているのである。最初の日にクラス分けのテストがあり A, B, C の3段階に分けられた。もちろん私は初級の A クラスである。クラスは生徒5人に先生が1人。5人とも「外国人」。私の外は、オーストリア人、デンマーク人、そしてフランス人 (ルシヨン地方以外の出身) が2人である。初級といってもなかなか高度な内容で、予備知識が少し無かったならついてゆくのは困難であつたらう。

ところで、ルヌヴィエ高校の中はあたかも「小カタルーニャ国」となったかのように総てがカタルーニャ語でことが運んだ。掲示も会話も総

てカタルーニャ語。言葉の不自由な私はフラストレーションの連続の毎日であった。ところが高校を1歩外に出ると今度はまるで別世界で、そこにはフランス語の世界が開けているのだ。町の総ての表示はフランス語で書かれているし、耳にする言葉もフランス語である。これは例えば同じカタルーニャでも、南のバルセロナなどの状況と比較すると違いがよく分かる。バルセロナでは駅など公共の場での表示は2言語（カタルーニャ語とカスティーリャ語＝スペイン語）であるし、カタルーニャ語も耳に入ってくる。プラダの町でカタルーニャ語を聞こうと思ったら、古いカフェなどに入ってそこの主人にでも思いきってカタルーニャ語で話しかけてみなくてはならない。うまくゆくとそれまでのフランス語が消え去り、カタルーニャ語を聞くことができる。しかし誰に狙いを定めるかとい

うのが意外と難しいのである。というのも、プラダの住人が総てカタルーニャ人とは限らず、フランスの他の地方の出身者かもしれない。またこの町、あるいはこの地方には、ピエ・ノワールと呼ばれるアルジェリア生まれのフランス人や、南スペインからの出稼ぎ労働者も数多い。またルシヨン人であっても、必ずしも誇りをもってカタルーニャ語を話すとは限らない。この言語を、フランス語に比べて文化的に一段低い地方語としか見なさない風潮も依然根強いようである。プラダ滞在中に2度程新聞に話題を提供した。ひとつはカタルーニャ語の新聞 *Punt Diari*、他のひとつはフランス語の新聞 *L'indépendant* である。前者に私をテーマにしたカリカチュアがでた。ひとりの日本女性がルシヨンの男性に向かってカタルーニャ語で道を尋ねている。しかしその男性は「カタルーニャ語



*Punt Diari*, 1987. 8.21

わからないんです。ごめんなさい」とフランス語で答えているのである。ラジオのインタビューも2度受けた。1度は Radio Arrels (Arrels とは「根」という意味である) というカタルーニャ語の地方自由放送ラジオで、もう

1度は名前は忘れてしまったが、パリに本拠を置くもちろんフランス語放送のラジオ局である。そのときに必ず受けた質問は、この土地の人でさえカタルーニャ語を勉強しようという人は少ないのに、何故遠く離れた日本のあなたがこの

言葉を学ぼうとするのか、というものであった。確かに北カタルーニャでは南に比して、カタルーニャ語の置かれている状況は厳しいように見えた。学校教育でも、制度的にこの言葉の教育は保障されていないし、ラジオ・テレビでもカタルーニャ語放送は極めて少ない。テレビでは、FR 3（地方放送のチャンネル）で3週間に1度20分の放送しかない。それも1980年以前は皆無だった。ラジオでは先程挙げた Radio Arrels 以外は、Radio France で毎日30分の放送があるが、これも10カ月前に始まったばかりである。

最後に、短かったけれども今回の UCE 参加を通じて極めて強く感じたことがある。それは UCE で出会った人々を通じて感じられたカタルーニャ社会の充実した躍動感とでもいえるものである。これは東京やパリの醒めた社会ではもうなかなか感じるができなくなっているものである。その躍動感には目的を持った社会に見られるものであり、長い間の抑圧から解放されたナショナリズムの高揚がそれを裏打ちしているようである。ナショナリズムといってもカタルーニャでは、バスクと違って今のところテロには走っていない。確かに急進的なグループもあり、カタルーニャの独立を叫んだりしているが、大方の見方は、ヨーロッパ全体が国境を取り払ってひとつになろうとしているときに、

新たな国境を作るようなやり方は時代の趨勢に反するというようなものである。また少し考えを進めてみるならば、言語・文化の特性を拠り所とする民族というものは、近代国家の持つ国境というものが完全に消失したそのときにこそ、新たな意義をもって浮かび上がってくるのではないだろうかと考えられる。ソウルの後、1992年のオリンピックの開催地はバルセロナに決まった。カタルーニャはこの国際的行事に向けて、経済的にも社会的にもますます高揚してゆくであろう。大いに興味を持って見守ってゆきたい地域である。また再度 UCE に参加する機会を持てるならば、その時は言葉をもっと自由に使えるようにして参加したい。UCE の豊かなプログラムを100%享受し、より多くの人々ともっと深く語り合えるようにするために。

\* カタルーニャの地名は、原則としてカタルーニャ語の発音に則った表記とした。例えば、カタルーニャ（カタロニア）、プラダ（プラド）、ジロナ（ヘロナ）、等。（ ）内は一般に流布している呼称。

プラダ滞在中、UCE の主催者のひとりであるペルピニャン大学文学部カタルーニャ学科の Pere Verdager 教授といろいろ話し合う機会を得た。記して謝意を表したい。